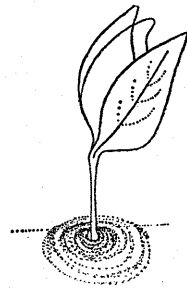


私の保育

——盲学校での混合保育——



猪平 真理

「せんせい、おはようございまーす」の元気な声が、廊下を駆け抜ける音と共に、次々と部屋にとび込んできます。まだ始まりの二十分も前です。ここは盲学校の幼稚部ですが、この朝の始まりを待ちかねて集まって来るのは、目の見える健常の三才児です。この子ども達は盲学校のすぐ近くに住んでいるので、住まいが遠くにある視覚障害児より、ずっと早く登校するのです。

このような朝の光景がみられるようになってから四

年、私達の試みてきた盲児との混合保育もやっと軌道に乗ってきました。近頃ではいわゆる統合教育、あるいは混合保育といわれる実践も各地で行われ、その成果も次々に発表されています。私共の保育もその一つですが、盲学校という障害児の学校の方がベースとなっている例として、ここに紹介させて頂こうと思います。

盲学校の幼稚部は、盲児の早期教育の必要性が叫び出されてから、全国的に充実されてきています。しかし、

この施策とは裏腹に、近年、そこへ通う盲幼児の数が減ってきてしまいました。特に東京都内では四校ある盲学校幼稚部のうち、二校までが現在休部状態です。本校でも四才児、五才児合わせて、それまでは八〜十人も在籍していましたが、五十三年度には三人、五十四年度には二人というように極端に減ってしまいました。

これは全国的に幼児の数が減り、又医学の進歩等も加えて、視覚障害児の全体数が一時よりも減少したこと、そして一般の障害児への理解が広がって、地域の幼稚園や保育園で受け入れてもらえるようになったこと、又もう一つは、市区町村の福祉政策が進んで障害児の通園施設が増えたこと等がその理由にあげられるように思われます。

視覚に障害があつて、しかも幼児の場合には言語だけの指示では伝達できず、手をとって指導しなければならぬことが大変多いものです。ですから、在籍児の数が減って教員の手が行き届くのは、一面良いことのように思われます。しかし満足な子どもの集団がないところで

は、幼児時代の健全な発達に何か欠けるものを残さないでしょうか。幼稚部を担当するものにとって、これは深刻な問題でした。

そこでまず、これを補う手段として交流保育を定期化するのを考えました。子どもの集団を外部に求める方法です。私達は以前から本校の近くにある幼稚園に協力をお願いして、何度かその大勢の園児達と遊ばせてもらってききました。それを五十三年度には、週のうち一日を一年間にわたり交流させてもらえるように定期化したのです。幸い協力をして下さる幼稚園があり、複数の担任が毎回子ども達を連れて通うことになりました。この時の在籍児は年長児ばかり三人で、目以外の障害もない子ども達でした。この時は日常的な保育活動の他に、いもほり遠足やゆうぎ会等の行事にも積極的に参加でき、盲児三人にとってこの幼稚園で交流する日は、緊張感のある楽しい日となりました。毎回、朝、私達が園の門まで来ると、大勢の園児達は歓声を上げて迎えてくれ、我先に手をつなごうと大変な騒ぎを起していました。こ

の交流保育は園の先生方と話し合いを重ねて行なわれたものでしたが、週一回ということもあって、盲児の本来の力を充分に發揮することができず、最後までお客さん的な存在でした。

次の年、五十四年度は在籍児が二名で、一人はことばを持たない重複障害児、他の一人も時々一人言をわずかにつぶやくだけで、何事にも意欲を持っていないような子どもでした。この二人だけの生活ですと、個別指導には徹底できませんが、子どもの声というものが全くない幼稚園です。それ故、これまでのように、外に出かける方法では、かえてこの子ども達に負担を負わせるような気がします。そこで次のような案を考えました。それは健常児の方にこの学校へ来てもらい、遊び仲間になつてもらおうというものです。本校のある文京区には国公私立の幼稚園も多く、保育園も充実していて、その園児の年齢である四、五才児も家庭にはいないと思われ、そこで三才児に焦点をあてることにしました。当初区役所の出張所あたりで三才児のいる家庭を探すか、近隣を尋ね歩く

かせねばならないと考えていましたが、偶然校庭に遊びに来た子どもに声をかけ、そのお母さんの口聞きで、たちまち予定していた五人の三才児が集まってしまいました。もちろん、公式に認められた在籍児ではなく、単なる遊び仲間ということだったので……。このような経緯の中で混合保育の形態ができていきました。三才児はその後五十五年度には八人、五十六年度には十人、今年度は十二人と次第に増やしてきています。

盲児はこの集団の中で私達の子想したより多くの良い刺激を受け、成長していつてくれました。この四年の間に次のような例があります。初年度のT子ちゃんは自発語を一つも持っていませんでしたが、「ハイ」という返事を獲得してくれました。友達がいるおかげで出席をとる時の返事がたくさん聞けたのです。もともと活発な子どもであったK君は、警戒心が強すぎたり、わがままな面があつて、最初はいまぐち友達と遊ばせませんでした。しかし二年間を混合保育の中で過ごすうちに、三才児の友達の家へ泊まりに行く程の仲良しができました。K君

には毎日、実に楽しそうに遊んでいました。次はK君の大好きな遊びの一つ、ウルトラマンごっこの採録です。

ねえ、みんな。

ウルトラマンごっこしようよ。

ぼく、ウルトラマンエイティだよ。

さところちゃんはももレンジャーになんな。

たかしくんは、カーくんとおなじ、

ウルトラマンエイティでもいいよ。

アンくん、たたかいだ。

シャー、トゥー、バシーン。

ウルトラマンはつよいんだぞ。

とっちゃん、しね。

ぼくはとっちゃんをやっつけたんだ。

アンくん、さところちゃん、たかしくん、

とっちゃんしないよ。

どうしようか。………まあいいや。

みんな、こんどは先生をやっつけようよ。

ねえ、みんな。

………

あーあ、いなくなっちゃった。

(K君は全盲のため、友達があつて八方へ散ってしまつて、

ついて行けません。こんなこともしばしば見られま

す。)

K君は年齢が3才児よりも上であつたこともあつて、

遊びの中ではリーダー格でした。友達とエネルギーをぶ

つけ合うように充分遊ぶ中で自信をつけ、当初見せてい

たビクビクした姿は全く見られなくなりました。

盲児の中には同じ年代の仲間を嫌つたり、恐怖の対象

とまで思う子どもがいます。このような傾向は、就園時

までの乳幼児期に同じ年代の子ども達と遊ぶ経験が少な

かつたり、目の手術等で入退院を繰り返して、限られた

大人とのみ過ごしてきた盲児に多く見られます。

H君は子ども達が遊ぶ声を、「うるさい、うるさい」と

言い、これを嫌つて保育室から出てしまひ、ドアの外に

立たずんだりしました。Y君は入学した一学期の間、友

達が一緒にいる場では決して歌わず、遊ばず、食事も摂

らないという子どもでした。しかしY君も次第になれ、「ふみちゃん」とか、「ターくん」とか、友達の名前をつぶやくようになり、次第に明るい表情になって少しずつ遊ぶようになりました。

障害児の早期教育という点、即、訓練を考える風潮があります。これももちろん大切なことですが、どんな子どもでもまず充分に楽しく遊んで欲しいと思います。それには、子ども達の遊びのある環境が用意されるにこしたことはありません。これは障害の重い子ども達にとっても必要な環境であろうと思います。

一方、この混合保育は健常児の三才児にとってはどんなものだったのでしょうか。初年度は五人の集団でしたが、一年間を終える三月にはこの五人の全員のお母さんから、後の二年間もこのままおいて欲しいと言われる程、喜んでもらうことができました。小人数の手の行き届いた保育が魅力だと言うのです。この近隣でも子ども達の数が少なくなつて、友達を作る機会がなく、家にもつた生活をしていたのが、本校での保育で友達を知る

ことができ、友達と遊ぶ場を与えてもらったことは、本当にありがたいことだとも聞きました。三才児の通い始めはまだ自分が遊ぶことのみがせいっぱいの平行あそびの時期ですが、二期の運動会や音楽会がある頃には集団行動もできるようになります。そして三月の送別学芸会では、小学部の人達に負けないような劇を演じてくれます。

また小さいうちから障害児の人達への思いやりを育ててもらうのは、何にも増して貴いことだと涙を流さんばかりに言つて下さる方もあり、かえつてこちらが恐縮する程です。三才児が初めて盲児に接する頃は、盲児の見えない目を見て不思議そうであったり、気味悪がったり、その気持のままを表わしています。しかし、こちらがそれにこだわることもなく、見えない人にも他の人にも同じ接し方をしていなのを見ているうちに、この人達も私達と同じ態度をとるようになるのです。一年を一緒に過ごすうちに、「ぼくのお弁当には〇〇が入っているよ」と盲児の手をそつと持つて触らせたり、「しんちゃ

んのせてあげよう」と足の不自由な盲児を二輪車にのせたり、ことばのない盲児には出席をとると、手をとって挙手させながら「ハイ」と代弁してくれたりします。

このような心優しいやりとりを見ていると、こちらもほのぼのと暖かい気分になります。

三才の希望者は二年目からロコミですが、二十名にもなりました。今のところ、健常児のみでも遊べる集団ができるようにと考えて、十人程度を限度とし、月齢の低い人や学校から少しでも遠い人には遠慮して頂いています。

今年度ももう卒園の時が迫ってきました。春から夏にかけて毎日のように、体を泥んこにして砂場であそび、最後はいつも真裸になって走りまわっていた三才児の人達ともお別れです。就学猶予をして、この幼稚園に三年間通ったI君も、四才児の終りにやっと歩けるようになって皆を喜ばせたS君も一年生になります。S君のお母さんはS君が生まれてから、健常児をもつお母さんとお話をしたことがなかったけれど、この二年間でお母さん

ん同志のおつきあいができるようになって本当によかったです。これからS君を育てていく自信を強く持つるようになったと言っています。

この混合保育も、三才児が正式の在籍児でないこと、そして盲学校へ入学する盲児の障害がますます重度化する等の問題を抱えています。しかし、ここしばらくは、この形態を続けることができるのではないかと思っております。

(筑波大学附属盲学校)

